

二〇二五年度

二月三日午後入試

国語 (45分)

注意

- 1 開始の「チャイム」が鳴るまでは、中を見てはいけません。
- 2 答えはすべて解答用紙の解答らんに、はっきり書きなさい。
- 3 終わりの「チャイム」が鳴ったら、とちゅうでもやめなさい。
- 4 問題のページは、5－1 から 5－13 まであります。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(字数制限がある場合は、句読点や記号も一字に数えます。)

「協議会」の失敗

近年、何らかの地域課題を解決しようとするとき、「協議会」というものを設置することが多くなっています。たとえば、地域の自然保護を進めようとするとき、行政、専門家、地域住民代表、学校関係者といった、自然保護に関係する幅広い「利害関係者」を集めて協議会をつくり、そこで方策を話し合ったり、計画を作ったりするやり方です。自然保護のみならず、防災、まちづくり、交通など、さまざまな分野でこの協議会方式は一般化しつつあります。

たぶんそのこと自体は悪いことではないでしょう。いや、むしろよいことでしょう。行政や専門家が勝手に決めてしまうのではなく、いろいろな立場の人が集まって話し合い、ものごとを決めていく、というのは、考え方としては間違っていない①。

しかし、現実にはこれがうまく行っていないことが少なくありません。協議会を設置してみたものの、そのテーマに関する参加者間の温度差が大きく、足並みがなかなか揃わないことがよくあります。また、そもそも協議会を立ち上げたといっても事務局は行政が握っていて、なかなか行政主導の域を出ないことも少なくありません。あるいは、協議会で話し合うといっても、それぞれの思惑が違っていて、何をどう話してどう決めるのか、なかなか折り合いが付かない、ということもあります。

協議会はなぜうまく行かないのでしょうか。私は、その大きな要因の一つに、社会を単純に見てしまっている③ということがあると考えています。

「いろいろな人が集まって話し合ってもものごとを決めていく」ということを、「利害関係団体の代表者が出席する協議会という場を作る」ということに置き換えてしまうのは、果たして正しいでしょうか。「いろいろな人」とはつまりいろいろな利害関係団体なのだ、なぜなら人びとは各利害関係団体に分類されるからだ、と考えることは、複雑な社会を単純に見すぎではないでしょうか。「話し合ってもものごとを決める」ことを「話し合う会議を設置する」ことに置き換えることは正しいでしょうか。

たとえば、ある個人が教育にかかわる人であると同時に地域で暮らす住民でもあったり、ある個人が自然保護の関係者であると同時に地域で商売をしている人であったり、ということはごく普通にあることです。さらに、人の考えや思いは、日々変わります。定型的な不変の「意見」は誰ももっていないものです。また、「話し合う」場は会議に限られないはずです。さまざまな場所で日常的に対話は行われており、むしろそちらのほうが本当の意味での合意形成に寄与しているとも言えそうです。

合意形成の困難

社会は複雑で多義的である。それが本来の姿です。

社会が複雑だからこそ、問題解決には合意形成が必須です。複雑さの中で、私たちはつい専門家に任せたくくなります。しかし、専門家は、データは出せても、答えは出せません。地域でという自然環境を再生すべきなのかを科学的に決定することはできません。という福祉サービスを提供すべきなのかについて、科学的な解があるわけではありません。問題はいつも不確実性を有し、さまざまなファクターがからみあっています。こうすればこうなりそうだ、ということは科学的に言えても、不確実性を拭うことはできません。また、そうなることが「望ましい」ことなのかどうかも、専門家には決められません。結局のところ、こう

することが望ましいと社会的に合意できたことが「解」^④なのです。「解」は社会的にしか決定されません。

しかし一方で、協議会の例でわかるとおり、形式的な合意形成の場合はなかなか機能しにくいものです。すくなくともそうした場の設置だけで本当の合意形成に至るのは難しいものがあります。複雑だから合意形成しなく、しかし複雑だから合意形成しにくい、というジレンマを私たちは抱えています。

⑤ 同じことは、地域課題の話を超えて、広く社会全体の課題についても言えるでしょう。⑥ 複雑で多義性に

満ちたこの世界の中で、どうやってよりよい社会、よりみんなが暮らしやすい社会を作っていけばよいのか。そこには幾多の困難がたちはだかります。なにごとにおいても不確実性が高く、こうすればみんなが幸せになれるという確たる社会像はなかなか見いだせそうにありません。それぞれが目指す社会像にはズレがあり、ややもすればそれは対立となります。下手をすると、何か強いものの、「正しそうな」ものにみんながさがろうとする風潮が生みだされかねません。

社会学実践をしよう

合意形成の困難、共通の社会像を描くことの困難の中で、それを突破するには、いかにも地道な方法であるものの、対話を積み重ねていくしかありません。一人ひとりがどういう課題を感じているのか、どういう社会像が望ましいと考えているのか、そうしたことを対話しながら、一つひとつ共同の規範をつくりあげていくことが必要です。

そこまで考えると、これは社会学のプロセスそのものではないかということに気がつきます。そうです、この本で述べたことは、社会学の説明であると同時に、私たちがこの複雑な世界の中で何かを決めたり規範を作り上げたりする技法の説明でもありました。民主主義を、制度として考えるのではなく、対話から規範と行動を生みだしていく日々の実践の集積と考えるとき、社会学はその推進力となりえるのです。

「歴史」が歴史家だけのものではなく人びとのいとなみであることを表わす「歴史実践」という言葉があります。私もあなたも、さまざまな日常実践の一つとして日々「歴史」を描いている、過去とかわる実践、歴史実践を行っているのだ、という主張です。「みかんをほおばりながら、じいさんの「昔は良かった」話を聞いているあなたは、じいさんと一緒に歴史実践をしている」（保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー』）のです。専門家でも、ましてや国家でもない、私たち自身が「歴史する」ことに力点を置いた議論が「歴史実践」です。

同じことが社会学にも言えます。社会学とは、「職業的な社会学者の仕事」を指すのではない、と考えたと思います。複雑な社会の中で対話的で規範的な知識を生産しようとする作業は、実は多くの人びとが日々行っていることだし、行えることだと考えます。それをもっと意識的に、もっと確実性と実効性を高めて行おうということこそ、この本が意図してきたところです。みんながそれぞれの場でソシオロジスト（社会学者）になる、みんなが「社会学する」、その営為を「歴史実践」にならって仮に「社会学実践」と呼んでみましょう。

聞くことが基本的な姿勢

ではその社会学実践の要諦は何でしょう。⑦ 社会学の技法を使って、複雑さの中で社会を作り直すにはどうすればよいのでしょうか。

まず第一に、聞くことこそが規範を作り直すための基本的な姿勢だということです。社会的に大事なことは、聞くことによって見出されます。

あらためて、「聞く」というのはどういう行為こういでしょうか。「聞く」とは相手の意味世界を理解しようとする行為です。相手の物理的な何かではなく、相手が「見ている世界」です。そこへの想像力をもちながら聞きます。こちらのフレームで相手の言葉を勝手に解釈かいしゃくするのではなく、相手には何がどう見えているのかを理解しようとしながら聞きます。一人の人の中に一見矛盾むじゅんするような複数の声があることにも注意します。そして多くの場合、相手もこちらの「意味世界」を探ります。お互いの意味世界を探りあいながら、何かを見出していく。それが対話です。

聞くとはいったい何なのか、対話するとはいったい何なのかは、実のところ難しいものであり、何が正しい「聞く」なのか、何が正しい「対話」なのかは、私にもよくわからないところがあります。相手が「わかる」というのは本当に難しいし、本当のところはわからないのかもしれませんが。しかし、「わかる」かどうかを超えて、聞く・対話することによって何かが生みだされることは確かです。哲学者の三木那由他みきなゆたは、コミュニケーションとは、話し手の意図を聞き手に伝えるというよりも、話し手と聞き手の間で、今後どういう行動をしていくべきかという規範を生みだすものだ、という議論をしています（三木『話し手の意味の心理性と公共性』）。対話とは、単に情報や個人的信念をやりとりするものではなく、なにがしかの共同性や規範を生みだすものです。そうした何かが生みだされること、それが「聞く」ことであり、対話である、と考えてよいのではないかと思います。

対話を継続し蓄積する

社会学実践じっせんにおいて「聞く」「対話」により生みだそうとしているものは、何らかの社会的に大事なことについての認識にんしきであり、共同の規範です。

この共同の規範を着実に作り上げていくためには、「聞く」「対話」を単発で終わらせないで、継続すること、蓄積していくことが必要です。この継続や蓄積ということが、社会学実践の重要なポイントの二つ目です。「聞く」「対話」を継続し積み上げることは、社会学の営えい為に置き換かえると、「調査」とは、継続的で多様な「聞く」によってデータを「集める」ことです。そして、第3章で述べたとおり、その「聞く」対象は、人だけでなく、文献・資料や統計なども加わります。

調査する、というのは専門家が行うものと思ひ込んでいる人も多いですが、そうではありません。複雑さの中で社会を作り直し規範を作り直すために、継続的な対話やそれを組織的に行う社会学的な調査は、重要な役割を果たします。それを専門家だけに任せず、多くの人が参画することで、幅広く共同で規範を作っていくことができます。

あらためて強調しておきたいのは、このときに集めるものは「しつかりしたデータ」であることが大事だということです。そして社会学実践にとつての「しつかりしたデータ」とは、まずもってしつかり対話的に集められたデータです。一方的な視点で無理矢理集められたデータは、たとえデータの数が多くても、社会学的な実践にとっては意味がありません。

共同で分析し提言する

対話的に蓄積した「意味」をもとに、人びとにとって大事なことを共同で見つけ出そうとするとき、その間をつなぐものが「分析」になります。ですから、分析するという行為もまた、社会学実践の重要な柱になるはずです。第4章で示したように、その分析は、多くのデータをさまざまに圧縮しながら、分類・類型化する、傾向を見る、比較する、関係をさぐる、などを地道に行います。そして、そこから何らかの大事なこ

とを発見し、提言します。

この分析・提言は、本来、一人で行うものというより、むしろ共同で行うものだと考えたいと思います。社会認識は対話的にしか生まれませんし、規範は共同でしか作ることができません。

みんなで分析し、提言するというのは、それではどのように可能でしょうか。

近年、新しい民主主義の方法として、ミニ・パブリックスと呼ばれるものが世界中で注目されています。ミニ・パブリックスとは、無作為抽出で選ばれた市民が議論をしてものごとを決めていくという手法です。まずはその地域（あるいは国全体）から人を無作為に選び、たとえば三日間、専門家からの情報提供を受けながら、グループに分かれて議論し、最後に全体で何らかのことを決めたり、提言書を作ったりします。町に路面電車を導入するかどうかといった地域課題を話し合うミニ・パブリックスもあれば、国の原発政策をどうするかという社会全体の課題を話し合うミニ・パブリックスもあります。

ミニ・パブリックスでは、少数のメンバーが、さまざまな情報をもとに、かなり突っ込んだ議論をします。情報はさまざまな立場の専門家や、その問題についての利害関係者などから多角的に与えられます。そして、グループで比較的長い時間をかけて議論します。与えられた情報をみんなで分析し、なにごとかを見出していくのです。グループ内にたとえ対立する意見があったとしても、それをただ言い合うのではなく、与えられたデータを一緒に分析しあうというところに重要なポイントがあります。共同の作業は信頼を醸成させ、その信頼がさらに深い議論を生みます。そしてそうした分析や議論にもとづいて最後に何らかの提言を作ります。

こうした市民による議論、意思決定のための人びとの議論を「熟議」と呼びますが、その熟議の核をなすものは、共同の分析だと言ってもよいのではないかと思います。

共同の分析の場を作っていくことは、こうしたミニ・パブリックスだけでなく、幅広い場面で可能でしょう。社会のさまざまな場面で熟議の場を作ること自体が、社会学実践の重要な柱になります。

⑩ 多様な場で、人びとが対話し、データを集め、共同で分析をし、広く提言し、実行する。それを繰り返す。それがみんなの社会学実践であり、複雑な社会の中でみんなで規範的な知識を生産する実践です。

⑪ 社会学することの喜び

⑫ 社会はとても「やっかい」です。社会はつぎはぎだらけで見通しが悪く、意味も複雑に錯綜しています。社会が複雑であること、意味が多重に重なり合っていることは、この本で繰り返し述べてきたところですし、社会学実践の中でもとくに認識しておく必要があることです。

しかし一方で、このようにも思います。「やっかい」だ、複雑だ、というのは、もしかしたら、「全体」を見てそれを「操作」しようとするときにそう見えるだけなのかもしれません。多義性は、確かに「扱う」には「やっかい」です。しかし、「扱う」のではなく、その中で具体的に行動すること、その中で試行錯誤することは、確かに困難もある一方で、むしろ楽しいことかもしれません。聞く、対話する、共同で分析する、そうした社会学実践は、つまりはコミュニケーションであり、また、そこから何かが生まれることに一緒に立ち合うことができる行為です。私たちはそうした行為にしばしば喜びを感じます。この喜びの感覚は、人類が社会というものを作り持続させる中で獲得したものかもしれません。

社会は本来、順応性を持ち、解決力を内包しています。「社会学する」ことは、その解決力を引き出す触媒の役割を果たします。そうした社会学することの楽しさに、もっと多くの人が自覚的になるとき、よりよい社会へ向けての道が少し開けるのではないかと私は考えます。

（宮内泰介『社会学をはじめ 複雑さを生きる技法』より）

※（注）

ファクター——要因。

縷々——細かくくわしく。

営為——いとなみ。

要諦——ものごとの最も大切なところ。

醸成——じようせい 雰囲気や状態を少しずつ作り出すこと。

触媒——しよくばい ここでは、何かを変化させたり生み出したりするきっかけとなるものご

とのこと。

問一——線①「これ」が指す内容として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 行政や専門家が話し合って協議会に参加する人を地域から選別すること。
- イ 地域課題の解決のためには協議会が有効だと理解してもらうこと。
- ウ 幅広い「利害関係者」を集めた協議会を作りものごとを決定すること。
- エ 協議会を作るにあたって幅広く「利害関係者」を集めてくること。

問二——線②「折り合いが付かない」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「折り合いが付かない」は「折り合いが付く」を打ち消した表現ですが、「折り合いが付く」の意味として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 何について話し合うべきなのか問題点がはっきりとする。
- イ 違う考えで行動している者同士が同じ場所に集合する。
- ウ お互いにゆずりあっておだやかにものごとが解決する。
- エ 最終的な決定権を持つリーダーがどうするかを決定する。

2 「折り合いが付く」と同じような意味で使われている四字の言葉を、——線②の部分がある『協議会』の失敗」というタイトルがつけられた意味段落の中からぬき出して答えなさい。

問三——線③「社会を単純に見てしまっている」とありますが、筆者は「社会」についてどのように考えていますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

- ア 足並みがなかなか揃わなくても、多くの人々が地域や団体のわく組みを越えて、課題解決のために協議会を設置しようと日々努力を続けているのが社会である。
- イ いろいろな利害関係団体があり、各利害関係団体の人々は常に自分たちの利益を優先するため、対話によっては合意形成ができないのが社会である。
- ウ 自分たちで話し合ってもものごとを決めるよりも、行政や専門家に判断をゆだねた方が楽でよいと考える人々が、大多数をしめているのが社会である。
- エ 個人として複数の立場に置かれ、時と場合によって意見を変えることもある人々が、日ごろからさまざまな場で合意形成につながる対話をしているのが社会である。

問四——線④『解』について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 ここで『解』とかぎかつこがつけられているのはなぜだと考えられますか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 辞書的な意味だけではなく、筆者が特別な意味を持たせて強調していることを示すため。
イ 筆者の主張の中でも重要な意味を持つ言葉として、論理を展開する前に定義しておくため。
ウ 専門家であってもそうでない人であっても共通の意味で用いる厳密な学術用語であるため。
エ この後の段落でくわしく述べていく「解」の中身について読者に期待感を持たせるため。

2 筆者がここという『解』とはどのようなものですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 科学的に導き出された正しい答えではなく、社会的にこれでよいだろうとされた一時的な結論を指すもの。

イ 社会的にこうすることが望ましいとされた答えでありながら、科学的には実現不可能な理想のようなもの。

ウ 科学的に確実性のある答えだと断言できるものでなく、社会的な問題の解決にもつながりそうにないもの。

エ 社会的に決定された不確実な答えのことであり、専門家によって科学的に証明されるのを待っているもの。

問五——線⑤「同じことは、地域課題の話を超えて、広く社会全体の課題についても言えるでしょう。」とありますが、「同じこと」とはどのようなことですか。解答さんの「ということ。」につながるように文中から十五字でぬき出し、初めと終わりの三字を答えなさい。

問六——線⑥「複雑で多義性に満ちたこの世界」とありますが、「世界」が「複雑で多義性に満ち」ているとはどういうことですか。解答さんの「ということ。」につながるように三十字前後で答えなさい。

問七——線⑦「社会学の技法を使って、複雑さの中で社会を作り直す」とありますが、このようにないなみを筆者は何と呼んでいますか。文中から五字でぬき出して答えなさい。

問八——線⑧『聞く』とは相手の意味世界を理解しようとする行為です。」とありますが、「相手の意味世界を理解」するためにはどのような姿勢が必要なのですか。それが書かれている連続した二文を文中からぬき出し、初めと終わりの四字を答えなさい。

問九 ―― 線⑨「ミニ・パブリックス」について、次の1・2の問いに答えなさい。

1 「ミニ・パブリックス」の説明として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 地域や国の中から少数のメンバーを選んでグループ分けし、グループ同士で時間をかけて意見を言い合い、最後に専門家や利害関係者からの意見も加えたうえで提言を決定する手法。

イ 地域や国の中からランダムに選出された人たちが、さまざまな視点からの情報をもとに、少数のメンバーで構成されるグループに分かれて議論し、ものごとを決定する手法。

ウ 地域や国の中から専門家の助言にもとづいて選ばれた市民が、さまざまな立場の専門家から情報を提供を受けながらグループごとに議論し、最終的に何らかのことを決定する手法。

エ 地域や国の中から適切と考えられる人たちを選び出し、少数メンバーのグループに分けて時間をかけて分析や議論^{ひんせん}をさせることで、対立する意見のどちらを採用するかを決定する手法。

2 筆者がここで「ミニ・パブリックス」についてふれているのはなぜですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア ミニ・パブリックスが民主主義の新しい方法として世界中で注目されているから。

イ ミニ・パブリックスの手法が筆者の主張する社会学実践^{じっせん}に通じるものであるから。

ウ ミニ・パブリックスが地域や国の課題解決のために最も優れた成果^{すく}をあげているから。

エ ミニ・パブリックスは社会学の理論にもとづいて生み出された手法であるから。

問十 — 線⑩「多様な場で、人びとが対話し、データを集め、共同で分析をし、広く提言し、実行する。それを繰り返す。それがみんなの社会学実践であり、複雑な社会の中でみんなが規範的な知識を生産する実践です。」とありますが、筆者が文中で述べている「社会学実践」の手順を次のようにまとめました。

「社会学実践」の手順をまとめた次の文中の [] 内に指定された字数で文中からぬき出して答えなさい。

「社会学実践の手順」

○「聞く」「対話する」… [] (三字) を働かせてお互いの意味世界を探りあいながら、何かを見出していく。

○「調査」…「聞く」「対話する」ことを [] (八字) ことによって、多様な視点からのデータを集める。

○「分析」「議論」…与えられたデータをみんなで一緒に分析(データの分類・類型化、傾向を見る、比較、関係をさぐるなど)しあう。↓ [] (二字) の核をなすものとなる。

○「提言」…社会学認識を生み [] (二字) の規範を作りあげる。

問十一 — 線⑪「社会学することの喜び」とありますが、社会学をすることが喜びにつながるのなぜですか。それを説明した次の文の [] にあてはまるように、四十字以上四十五字以内で答えなさい。

私たちは [] から。

問十二 — 線⑫「社会はとて『やっかい』です。」とありますが、なぜ「やっかい」のですか。次のア～エの中から最も適当なものを一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 社会の中では、いろいろな立場の人が入り交じっているため意見の対立が生じることも多く、社会学実践の専門家であったとしても、どの意見に優先的に耳をかたむけるべきか見極めることが難しいから。

イ 社会の中では、ある人の利益になることが別の人にとっては損害となってしまうなど、利害関係が複雑に入り組んでいるため、すべての人に平等な利益をもたらすためにさまざまな工夫が必要になるから。

ウ 社会の中では、課題を一つ解決するだけでも複雑な「操作」が求められるのに加えて、多くの場合は課題がいくつも重なり合っており、社会「全体」をよりよくするための見通しがなかなか立たないから。

エ 社会の中では、一つのものがいくつもの意味を持っていたり、人や集団が互いにさまざまな立場や意見を持っていたりするため、解決すべき課題が生じた場合も簡単に答えを出すことはできないから。

筆者の論の要点として最も適当なものを次のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

ア 社会は複雑で多義性を持ったため、「協議会」のように社会を単純化して話し合いの場を設ける方法では、本当の意味で地域や国の課題を解決することはできない。協議会方式ではなく「社会学実践」と「ミニ・パブリックス」の手法を組み合わせることによって、社会が本来持っている順応力や解決力を引き出すことができるのである。

イ 社会は複雑で多義性を持ったため、そこで発生する課題の解決には困難がともなうが、一人ひとりが「社会学実践」を行うことによって、少しずつ解決につながる何かを作り出していくことができる。つまり、一人ひとりが自覚的に「ソシオロジスト（社会学者）」として行動することで、社会はよりよい方向へ向かっていくのである。

ウ 社会は複雑で多義性を持ったため、そこに暮らす人々が話し合いで何かを解決することは難しく、「ミニ・パブリックス」をはじめとした「社会学実践」を行うことが、ものごとを解決するためのただ一つの方法である。そのため、もっと多くの人に「ソシオロジスト（社会学者）」になるための教育をほどこしていく必要がある。

エ 社会は複雑で多義性を持ったため、何かの課題を解決するためには、いろいろな立場の人たちが「社会学実践」をすることが大切である。ただし「社会学実践」はややもすると存在感の強いものや「正しいもの」に影響されて道を見失う危険性を持ったため、筆者のような社会学の専門家から情報提供を受けながら行うべきである。

~~~~線A「歴史実践」とはどのようなもののかを調べるために筆者が引用している本を確認した

ところ、

内のように書かれていました。本文と

内の文章から読み取れる「歴史実践」

についての説明として最も適当なものを後のア～エの中から一つ選び、その記号を答えなさい。

「今の若いもんは、なつとらん」とか言いながら、じいさんが番茶をすすって愚痴りはじめるとき、みかんをほおばりながら、じいさんの「昔は良かった」話を聞いているあなたは、じいさんと一緒に歴史実践をしている。恋人と温泉旅行に行きがてら、近くの名所旧跡を訪問するとき、あなたは恋人と一緒に歴史実践をしている。お盆にお墓参りをしながら歴史実践してるし、同窓会に出席しながら歴史実践してるし、ジャズの名盤を聴きながら歴史実践してるし、身体のお傷を眺めながら歴史実践してる。あるいは、NHK大河ドラマを見たり、プレステの『信長の野望』で遊んだり、『陰陽師』や『ジパング』を読んだり、『機動戦士ガンダム』の『宇宙世紀』の整合性を議論したり、ユーロビートやロカビリーのかかるレトロ・クラブで踊ったりしているとき、僕たちはやっぱり歴史実践をしている。歴史なんて、僕らの日常生活のあちこちに溢れかえっているんですよ。ただ僕らは普段こうした活動を歴史実践とは思っていないんですね。そして、それは部分的には正しい。だって、恋人を温泉旅行に誘うのは、別に「さあ、いっしょに歴史実践しよう!」と思ってることでじゃなくて、「あそこなら宿泊旅行になるわ、うふふ」という別の目的があるからかもしれないし、『信長の野望』で遊ぶのは、TVゲームで遊びたいからで、歴史実践をしたいからじゃない。それは、たしかにそうです。ただですね、失礼ですけど、それを言ったら、いったい何人の歴史学者たちが、給料や名誉や地位や昇進といった目標をなんにも与えられないで、それでも純粋に歴史実践だけをできるでしょうか? 職業的歴史家は存在しますけど、「純粋歴史家」なんて存在しないでしょ? 歴史実践は、他のさまざまな日常の実践と並存し同時進行しているのが常態なんです。僕は、本来の目的や、もののついでや、方便や、偶然や、義務なんか複雑に絡みあって行われている日常の実践のなかで、身体的、精神的、霊的、場所的、物的、道具的に過去とかかわる結びつく行為、つまり歴史実践という側面にとくに注目しているにすぎないんです。

(保莉実『ラディカル・オーラル・ヒストリー オーストラリア先住民アボリジニの歴史実践』)

※(注) ジャズの名盤

プレステの『信長の野望』

ジャズは音楽のジャンルの一つ。名盤は優れた演奏を録音したもの。プレステはプレイステーションというビデオゲーム機。『信長の野望』は歴史上のできごとや人物を題材としたゲーム。

『陰陽師』や『ジパング』

どちらも歴史上のできごとや人物を題材としたまんが作品。

『機動戦士ガンダム』の『宇宙世紀』『機動戦士ガンダム』はアニメ作品。『宇宙世紀』という架空の時代を舞台とする。

ユーロビートやロカビリー どちらも過去に流行した音楽のジャンルの一つ。

ア 歴史家によって描かれた歴史をいっさい信用せず、自分自身で歴史を探究することこそが歴史実践といえる。

イ 歴史に名を残す偉人だけではなく、昔について教えてくれる身近な老人たちを敬うことも歴史実践といえる。

ウ 専門の学者が歴史を研究することも、人びとが普段の暮らしの中で過去とかかわることも歴史実践といえる。

エ 私たちの今の日常生活も、やがては歴史の一部になるものであると意識して生きることが歴史実践といえる。

## 二 次の漢字と言葉に関する問いに答えなさい。

問一 次の①～⑤の——線部のカタカナを、それぞれ漢字に直しなさい。

- ① 市のチョウシャに行って手続きをする。
- ② 女王のクンリンする国。
- ③ 兄は古典文学のソヨウがある。
- ④ 大雪によって交通機関がコンランする。
- ⑤ 動物保護をトナえる。

問二 次の①～④の——線部の漢字の読みを、それぞれひらがなで答えなさい。

- ① 最後まで初志をつらぬき通す。
- ② 大会の序幕となる試合が始まる。
- ③ 真綿はカイコのまゆから作られる。
- ④ 先生が生徒に教えを垂れる。

問三 次の①～④の漢字の組み合わせは、後のア～エのどれになりますか。その記号を答えなさい。

- ① 作文
- ② 国営
- ③ 永久
- ④ 勝敗

ア 同じような意味を重ねているもの

イ 反対の意味を重ねているもの

ウ 上の漢字が主語、下の漢字が述語となっているもの

エ 上の漢字が動作を表し、下の漢字がその動作の対象となっているもの

問四 次の①、②で示されているA・B二つの文の□にあてはまる同じ漢字一字をそれぞれ答えなさい。また、A・B二つの文の□にあてはまる漢字はそれぞれの文中においてどのような言葉に置きかえられますか。後のア～オの中から最も適当なものをそれぞれ一つずつ選び、その記号を答えなさい。

① A 次の試験に向けて早めに□を打つ。

B 先生のアドバイスを受けて、作文に□を入れる。

ア 対策    イ 関係    ウ 判断    エ 修正    オ 予想

② A 兄は文学研究の□をきわめようとしている。

B 世界を平和にするための□を探し求める。

ア 人材    イ 運勢    ウ 方法    エ 能力    オ 分野

